

九州大学百年史（三輪宗弘執筆、戦時中の研究）：
「第二章 戦時体制の形成（一九三一～一九四五）
第一節 戦時体制の形成と教育・研究」と「第三章
学徒動員・学徒出陣と敗戦（一九四一～一九四五）
第一節 研究動員」の解題

三輪，宗弘
九州大学：教授

<https://doi.org/10.15017/4774199>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 37, pp.97-100, 2022-03-25. 九州大学附属図書館付
設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：

【資料紹介】九州大学百年史（三輪宗弘執筆、戦時中の研究）

「第二章 戦時体制の形成（一九三一～一九四五） 第一節 戦時体制の形成と教育・研究」と「第三章 学徒動員・学徒出陣と敗戦（一九四一～一九四五） 第一節 研究動員」の解題

三 輪 宗 弘

解題

今回資料として、紹介するのは、筆者が九州大学百年史に書いた「第二章 戦時体制の形成（一九三一～一九四五）」の「第一節 戦時体制の形成と教育・研究」（資料紹介Ⅰ）と「第三章 学徒動員・学徒出陣と敗戦（一九四一～一九四五）」の「第一節 研究動員」（資料紹介Ⅱ）である。記録資料館（石炭資料研究センター）についても受け持ったが、これは後日掲載することにした。

『九州大学百年史』は九州大学リポジトリ（二〇一七年三月三一日版）で閲覧できる。ぜひ左記にアクセスされたい。表記や書き方が異なる場合がある。

https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/publications_kyushu/qut00h

九州大学・大学文書館に所蔵されている資料を読み、それに依拠して、書くという方針で九州大学百年史の執筆に臨んだ。私は紙媒体の大学史

と電子媒体の双方が出されるに違いないという確信持っていた。旧帝国大学の九州大学が百年史を紙媒体としても世に出さないなどということにはならないだろうと高をくくっていた。おそらく大学文書館の折田悦郎教授（現在名誉教授）もおそらく部数は少なくても紙としても刊行されるという思いであったであろう。大学文書館のスタッフは相当な枚数の原稿に追われているということを若いスタッフからお伺いした。令和四年一月一九日現在、『九州大学百年史』はネットで閲覧することはできないが、残念ながら印刷製本され、国立国会図書館に献本されていない。若い研究者はダウンロードして、PC上で論文を閲覧するのをよくみかけるが、小生の場合、ネット上から論文をパソコンにダウンロードしても、PDFから紙にプリントアウトして、目を通さないと読んだという気分にならない。紙上に、赤鉛筆や鉛筆で書き込みながら、付箋を貼りながら読み進めるという読み方が習慣になり、染み付き抜けられない。今回、『エネルギー史研究』に資料紹介として、活字として、私の担当

した戦時中の九州帝国大学の研究に関する二つの節を紹介したい。

九州大学百年史であるが、私はおそらく一番最後に原稿を出した一人であろう。理由をもっともらしく付け加えるならば、農学部戦時中の記録（教授会記録や科研費に関する記録）が探しても出てこないのである。こんなものがないはずはない、どこかにあるだろうと考えていたが、ついに出てこなかった。何らかの片鱗はあるだろうと考えたが、甘い観測に過ぎなかった。大学文書館の藤岡健太郎准教授（当時）に農学部関係資料を次から次へと閲覧させていただいたが、ついに小生があるに違いないと睨んだ記録は出てこなかった。その点を巧みに補い、カモフラージュしながら、原稿を書き上げた。「捜査令状」を手に持ちながら探し回る最中、膨大な会計帳簿が残っていることを知ったが、戦時中の医学部関係の購入に関する記録だけがさりげなくわからないように抜き取られている、ここまで徹底していたのだと思いつながら会計帳簿を眺めた。敗戦直後、医学部の裁判対策のために、九州大学の総力を挙げて徹底的に資料の隠滅を企図したことのだろうと筆者は閃いた。バラバラ眺めただけなので、調べればわかるだろう。それはそれとして、膨大かつ詳細な会計簿を眺めながら、これは戦時中の物価統計の貴重な記録で戦時中のインフレーションの実態が克明に追えると思った。しかし会計帳簿の一点一点の記録はあまりにも細かすぎて、時間がないという制約下では九州大学百年史には間に合わないと断念した。

そのころ箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転が進行中で、箱崎キャンパスに埃をかぶりうずもれていた書籍や雑誌に遭遇することもあった。東洋史が専門の川本芳昭附属図書館長（当時）は資料を捨てるのはよくないという意見をお持ちで、図書館が焚書坑儒をやったら笑い

話だということで、強力な援護射撃いただき、廃棄寸前の書籍（未登録や段ボールに詰められたまま眠っていたもの）を大学院生や職員有志とともにレスキューして（重複したものは廃棄した）、伊都キャンパスに移動させることができた。九州大学百年史に登場する『国防資料研究速報』（第一号から第四号）は永い眠りから目が覚め、焚書坑儒を免れた雑誌である。

藤岡准教授の手を煩わして、九州大学百年史の筆者担当部分を書き上げた。箱崎キャンパスに残った大学文書館で申請すれば、閲覧できる。

『自昭和十七年三月 至昭和二十年十一月 戦時関係書類』

『昭和十二年度概算書（一）』（参照別冊 亜細亜文化研究所創設二関スル経費要求書）『昭和十二年度九州帝国大学概算要求増減額事項別明細書』、『昭和十二年度概算中重要事項調 九州帝国大学』、『昭和十二年度概算重要事項説明書 九州帝国大学』、『昭和十二年度概算要求書 工学部』、『昭和十二年度概算要求書 農学部（一）』

『昭和十四年度概算書（一）』、『昭和十四年度概算書（二）』、『昭和十五年度概算書（一）』、『昭和十六年度概算書（一）』、『昭和十六年度概算書（二）』、『昭和十七年度概算書（一）』、『昭和十八年度概算書（一）』、『昭和十八年度概算書（二）』、『昭和十八年度概算書（三）』

『教授会資料』（医学部、工学部、農学部、理学部）、「評議会資料」、『福岡日々新聞切抜』

『昭和六年度 概算要求書』（昭和六年度 歳入歳出概算要求書類）、「昭和六年度 九州帝国大学特別会計概算書」、『昭和六年度 概算要求増減事項別明細書 九州帝国大学』、『昭和六年度 九州帝国大学特別会計概

算書」、「昭和六年度 九州帝国大学理学部創設費概算要求」、「昭和六年度歳出概算書 工学部」、「昭和六年度 概算書 法文学部」)

戦時中の研究に関して、米国では航空機用燃料（高オクタン価ガソリン）の研究は企業が受け持ち、合成ゴムや高分子合成の研究は大学が受け持った。大型爆撃機のB 29の開発や原子力爆弾のマンハッタン計画などの大規模プロジェクトがあった¹⁾。九州大学百年史では、総花的な研究費の配分（大学間、学部館、教授）と集中的な予算配分には、紙幅を割き、記述した。米国、日本、ドイツの戦時中の開発のやり方の違い・相違点は今日にも引き継がれているのであろう。

戦後に日独、さらに米国研究も調査したPBレポートの中で最も請求件数が多く、読まれたのが、リーダーのマイクロ波に関する研究で、後には電子レンジの開発につながる研究として再び脚光を浴びたと、米議会図書館に勤務するStam 智子氏から教えていただいた。軍事研究と平和研究の線引きがいかに難しいかよくわかる。

エボラ出血熱などの感染症の研究は米国陸軍が行い、その成果がワクチン開発につながっている。ロンドンやワシントンDCの交通カードであるOyster やSmartTrip が米陸軍と関係の深い企業が開発したシステムを利用していている。ドローンは空中撮影という平和利用もあれば、軍事目的にも転用され得る。日本の外為法別表では、ドローンは「無人航空機」というカテゴリーに分類され、「大学における営業秘密管理」の対象である。日本では平和利用でも海外では軍事転用される技術である。

「八月十五日の青春」刊行会『八月十五日の青春 大阪高等学校生(旧

制)の手記』を読む機会があった。小生の目に留まった箇所を列挙しておこう。昭和一八年に「徴兵適齢臨時特例」の公布にともない、徴兵適齢が一年引き下げられたために、「翌十九年には、大正十三年生まれと、私を含めた十四年生まれ(私は二月生まれ)が、ともに徴兵検査を受けて、相次いで入隊することになる。」(村田義人「わが内なる青春」、四九頁)と書かれている²⁾。

「昭和十七・十八年度は八月に入試が実施されたのに対して、昭和十九年度については大学入試を行わず、内申書と願書のみで進学することになっていて、旧制高校の文科生の場合、理科系である帝大農学部と、医科大に受験さえすれば、無条件に入学させてくれたので、徴兵されずにすんだのである。」(同上、五〇頁)

「その特典を実際に行使した者は、大高二回生の場合、文甲・文乙とも、いずれも一割未満だったという驚くべき事実である。」(同上、五〇頁)

下条義次「それ青洲の『春秋』」で戦争後について生々しく書いている。抜粋しよう。

「教授の中には戦争中の迎合論文のために追放されたり、疎外されていた不遇な環境から復帰したり、まさに価値のコペルニクスの転回が行われていた。戦争中は軍の意に従い保身に汲々としていたのに、戦後一変してにわか民主主義者となって、戦犯追放を声高で叫んでいる様子は、

嘗て非国民と大声で罵ったと同様の声が聞きとれた。あちらを向いて大合唱、舞台変わればこちらに向いて大合唱。ご都合全体主義の世の中がまた出現した。どれも情けないが現実であった。しかし生きて再び机に座ることのできた喜びは何者にも代え難いものがあった。(「それ青洲の『春秋』、七八頁)

『ゾルテン』『リカテン』『ジュンブン』について、中西和也「僕は軍人大好きよ」の中で「大高においては昭和二十年の十二月頃には既に広く流布していたように記憶している。」として、『ゾルテン』とは「敗戦に伴って廃校となった陸海軍学校からの転入学生に対する蔑称」であり、『リカテン』は終焉後に「第二学期に理科から文科への転科生」のことであり、『ジュンブン』とは「その名の通り、入学時から卒業まで一貫して文科に在籍した生徒」と説明されている。(『僕は軍人大好きよ』、三〇七～〇八頁) 当時の世相を鋭く抉る箇所を抜き出し披露しよう。日記を書くことで、自己の思考を冷静に眺めることにつながったのだろう。

「敗戦直後の社会情勢では猫も杓子も反戦主義者を装い、天皇も軍人も政治家も全てを戦争責任者と断じることによって自己の免罪符を手に入れようとした時代であり、『ゾルテン』がこれに反論することは到底許されるような風潮ではなかった。彼等の殆どは或いは沈黙し、或いは逃避し、一部は『ゾルテン』の前歴を隠してでも大勢に迎合して、世渡り上手なところを見せたのもあながち責めることはできない。」

もう二冊、筆者が面白いと思った回想記で当時の価値観がよくわかる

ものを紹介して、『九州大学百年史』の筆者の執筆箇所の解題として締めくくりたい。

寺西マリコ(桑原辰三郎註)『女子挺身隊甘木日記』(石風社、一九八三年)

鶴田寿美枝『ばれいしょの青春…学徒動員日記四一八日』(名古屋市広報研究所、一九九一年)

註

(1) U.S. Defense Threat Reduction Agency の刊行物やホームページで確認されたい。DEFENSE THREAT REDUCTION AGENCY のホームページ。
<https://www.dtra.mil/> 米陸軍はリベリアにおいて、エボラウイルスワクチンを接種している。

戦後の核兵器に関しては下記の本が詳し。Defense's Nuclear Agency 一九四七—一九九七 (DTRA History Series) 二〇〇三。

(2) 「八月十五日の青春」刊行会『八月十五日の青春 大阪高等学校生(旧制)の手記』(関西ビジネスインフォメーション(株)、一九九六年) 文科生の医学部に進学したケースは、釜洞剛「自分の道」(同書、二二七頁)、中原健三「八月十五日と私」(同書、二五一頁)を参照されたい。